

「半年坊さん語る」 金子、柳田両翁とその他

隅田 栄

先づいて本年正月、微力言うに足りない私如きに迄喜寿のお祝として高畑会長名筆の「寿」の見事な朱塗の大杯輪島塗を辰巳会からお恵み戴きましたことを「たつみ」誌上を通じ謹んでご厚礼申し上げます。

霜月十三日の日曜日に、大阪淀川添の網島田藤田男爵の大園園で近畿高知県人会年一度の総会が催され、大阪、兵庫、京都、滋賀、奈良、和歌山各県から千人近くが参集、高知県知事中心内力、県選出の塩見、大西、谷川、中野の衆参現議員、美馬県議長他が県代表として出席し、冒頭中野知事が県財政の日本最底に近い窮状を明解に要約し、スケジュールの関係で十分程度でしたが声を大にして往年の鈴木商店の隆昌を、希有な日本の世界的大事業者金子直吉翁を土佐の山間から輩出したと論述しました。同時にかかる現状のゆえに県外有力者の助力を懇請しました

が、参集者中「たつみ」会員も相当出席していましたが、金子翁を特に力説したのには非常の感激を受けました。私は喜寿杯拝受の席でご挨拶申しました様に、同郷の先輩明治三十九年一橋専攻科を谷干城將軍の書生として、高知市生れの北尾直樹氏と東京時代を共に苦学の刎頸の友と、亡父の親友で雲井通樟腦の西岡源次郎両氏のお世話で市高三年を十六で中退して大阪支店麦酒部の小僧として入店し、田屋商店主温情の上村政吉先輩により「たつみ」会の末席を汚しているに過ぎません。往年の小僧日記は刻明に在社當時を記録して笈底に照してありますが、柳田富士松翁は日曜を除く他は殆ど毎日大阪支店総監督としてご来店せられ、主として相場の変動の多い砂糖部を重点に、他部にも万全のご配慮をせられていたご様子でした。失礼ですが質素な小柄なご風姿、誠実、謙虚、温容なその举措

塚歌劇団からも研二生の「ザ・パズ」の八人が特別出演、緑のハカマのあの姿で「あ、宝塚わが宝塚」など主題のメドレーを披露、四曲目の最後「すみれの花咲く頃」には満場の会員特に耳を傾け万雷の拍手爆発して暫く鳴り止まなかった。式終つて一同万緑滴る前庭の園遊会場に移動した。

船関係会社の元社長）生駒権七君、益田乾次郎君（大福機工会長）、西沢武雄君（三菱の関係会社役員）、神戸一郎君（元日本生命常務・現大阪商業信用組合理事会長）（来てゐる筈だが会えなかった）。瀬能庚子松君（元兼松商店の役員）。一年下級生だったが諏訪山の麓から筒井ヶ丘の高商まで毎日徒歩で通学した連中の一人。ビール・冷酒・カクテルで思い／＼に乾杯。山海の珍味を賞しつ、昔の想出話に時の移るのを忘れていた。小野君と山側の建物（校舎や研究室）を見て廻り校門前に出た。まもなく市バスが来たので乗込んだ、西沢君も乗っていた。幸い座れた。やがて阪急六甲駅に着いた。三宮行市バス三宮で国鉄垂水で山電と乗り継いで帰宅。

五月十四日の朝日新聞は「青春時代に熱き思いはせて」の見出しに写真二枚入りで（神戸大、二〇〇人集い七五周年祝う）と題し、また神戸新聞も写真二枚入りで「七五周年神戸大六甲台に寮歌流れ卒業生ら園遊会約千人をこやかに」と詳細報じている。

更に記事は同窓会の会場の舞台には青春時代のあこがれだった宝

は六十年後の今も猶眼底に、ついきのうの様子に髣髴します。

お茶を差し上げて必ず有難うと仰言られ、社員幹部が事務報告をしてもああそう、ああそうと格別自説をお述にならないで鄭重に聴き入っておられました。

金子翁が大阪支店に私の在社當時ご来社遊ばされたのは六年十一月の末日のたつた一度で、柳田翁ご来店のなかった日で、小僧先輩の愛媛県生れの伊達信雄君が耳に口を寄せて金子翁と知らされ、井原五兵衛支店長を従えて店内を一巡され、砂糖部長の上村政吉、木材部長の須藤直吉、内国砂糖の森川氏、会計の鬚の五島氏、麦酒部の酒井丑松氏だけは席を飛び出して低頭平身し、金物部長の松本氏の各諸氏は自席に立って頭を下げて黙して深く敬意を表しました。二階の三品一本の日本商業出は井田亦吉、竹村房吉両氏が前同、応接室に井田、井原両氏と要談すること二十分位で他に商用があまりになつたであろう急遽支店を去られました。前記部長には全てご苦勞ご苦勞と等しく仰言られた様に思

芝の光栄に浴したのは七年正月恒例となつていた本店でのお家さんを中心に、左大臣柳田翁、右大臣金子翁を遠くに敬視した二回のみであります。

翁の去つた直後に、麦酒部のすぐ隣の応接室の掃除を命ぜられて入室したところ、帽子掛けに古びた中折帽子が一つ残されていた。手に取つてみると前方のつまみのところが長年月のご使用か小さな穴が空いている。伊達に聞くとこれは金子さんのものだよという。早速酒井部長にご覧に入れるものでもなく金子翁愛用せらるるもので君、すぐ大切に風呂敷に包んで本店に届けよと麦酒部専用の自動車で国鉄梅田に急行し、神戸駅から人力車で東川崎の本店で北尾さんに手渡すと有難うと大枚五円を拝戴した。私の月給の二倍だった。諸新聞の経済面や、「実業の日本」を隈なく熟読していましたので、当年所謂天下三分の一の、三井を抜き、三菱を凌駕した大鈴木の第一次大戦直後の正に旭日昇天振り、長堀橋北東岸親富火災保険支店となつた旧鈴木支店内は会社内和氣藹々として然かもそれぞれの担当業務に各自全力を傾倒して忙

殺され、社運の興隆に字義通り火花を散らして猛活躍していた実相も忘却し得ません。私は薄給のゆえに先輩から鈴木関係の参考書を借り、日曜は中之島の図書館に通つて日本事業界、特に経済に関する各般の書籍を涉猟してメモを取り、三井三菱に比して創業の浅いに、何のゆえに台銀の他に六十五銀行の言わば都市銀行として小規模なもの外に大銀行の後楯がなく、産業経営を主体で二厘或は三厘も日歩の高いハンデであつた風聞、金子翁一流の経営方針や、台湾の樟腦専売権獲得の為渡台して民政局長後藤新平氏を再度面会を求めて思いに委せず、神戸後藤旅館に後藤局長宿泊を促して金子翁の人物そのものを認められて遂に成功した惨澹としたご苦心のそれ小林氏経営の神戸製鋼を入手した経緯、独逸の空中室素のpatentを莫大な条件で他に先んじて買得して人造肥料に先手を打つた先見の明、繊維事業の将来を見越して広島県下大竹か、今日の帝人の大基礎を打ち立てた力腕、大屋晋三氏という大材を金子翁が捉えた無限大の幸運は世上類例を見ませぬ。明治四十年時代に溯るが柳田兄の

が、参集者中「たつみ」会員も相当出席していましたが、金子翁を特に力説したのには非常の感激を受けました。私は喜寿杯拝受の席でご挨拶申しました様に、同郷の先輩明治三十九年一橋専攻科を谷干城將軍の書生として、高知市生れの北尾直樹氏と東京時代を共に苦学の刎頸の友と、亡父の親友で雲井通樟腦の西岡源次郎両氏のお世話で市高三年を十六で中退して大阪支店麦酒部の小僧として入店し、田屋商店主温情の上村政吉先輩により「たつみ」会の末席を汚しているに過ぎません。往年の小僧日記は刻明に在社當時を記録して笈底に照してありますが、柳田富士松翁は日曜を除く他は殆ど毎日大阪支店総監督としてご来店せられ、主として相場の変動の多い砂糖部を重点に、他部にも万全のご配慮をせられていたご様子でした。失礼ですが質素な小柄なご風姿、誠実、謙虚、温容なその举措

名筆による責任技師の技術のミスで練瓦の様を堅くて歯も立たぬ国内では販売不能の製品に硬質を挿入した柳田翁の奇智で見事上海で全部を売り捌いたといわれる大里の製糖所を、三井に譲渡した時の取引の席上、明治初年梅田の旅の総帥益田孝が幕政末期三野村利左衛門からバトンを受け継いだ益田が、その人物を見込んで三井に抜いた岡山生れの煩さ型の典型で後年日本麦酒界の巨壁となつた例の馬越が、余りにも高額に失すると、金子よ、孰れ仇打ちをしてやるぞと凄んだと伝えられる秘話も私は仄聞ではあるがメモライズしてあります。

船鉄交換の何人も考え及ばなかつた救国の大構想や川崎造船の松方社長との血盟の交遊のそれは私には雲上の大伴であります。私が鹿兒島三年、東京四年の苦学の恩師で京大正四年独法首席卒業で刑法瀧川幸辰博士を抜いた代議士で弁護士土佐吉良川村（現室戸市）出身の鷲野米太郎先生の靴持ちで株主総会に出席して外人株主が多くて英語で総会をやつた東京海上火災保険会社社長で後に三

菱合資の総理事になった鎧を見る
と身震いしたと世評された各務謙
吉翁に援助されて昭和七年高畑会
長、永井幸太郎長老によって日商
岩井の創立は成り、西川政一氏の
力量とその人間性、信用によって
今日の大組織に大成したことなど
と共に、これも同郷の大先輩の楓
英吉氏の日本発条の日本に冠絶す
る特殊事業など一介の小僧出の片
々たる私如きの言及するところ
はありませんが、唯惜しくも志業
央ばにして病没せられた楓氏の後
を継いだ坂本君は私と小学校六
年間を同席した竹馬の友で、少年
時から純情、温厚、篤実、今日の
大成を成した誘因は嬌らず、昂振
らぬ彼の性行と、楓氏の恩義に酬
いて積年の事業企画、経営に対す
る無限の研鑽の尊い結実である
と思いますし、郷里第一の成功者
となったのは勉学時代賢母を失い、
一人愛妹と相当の辛酸を体験した
ことが却て楓氏の如き伯樂に恵ま
れて好運にも遭遇し、今は亡き鉄
の井上清君にも愛育されて鉄その
ものも判り社全体が坂本君の徳風
に微動もせぬ様に統卒されたと信
じます。

楓未亡人喜和恵夫人は坂本君の

忘恩の徒ならぬを口を極めて賞讃
しています。相会わざる四十年、
蝶を追い、麦笛吹き少年の日よ。
嗚呼、坂本君の神戸本店時代の先
輩で戦時私の住む八尾市山本に相
当期間住んで親交し、畏兄する簡
台出の久琢磨兄は土佐のいごそう
大宰相臣茂の親玉の吉田茂翁を小
型にした凡そ「たつみ」会中でも
全く異色の存在で神格者田宮嘉右
衛門翁、石井光次郎翁の幕下で名
門神戸高商に学生相撲黄金時代を
造り上げた功労者で、合気道、空
手など併せて十段の猛者ではある
が、長い若磐湯が余りにも過ぎて
神戸時代高血圧症で年余を近代医
学では不治の疾患で休養したが自
身で難業苦業し、特別の工夫創業
で全く異例な体調に迄引き戻して
現在東京の二番目愛媛の許で老後
を平安な生活のみか、道場を構え
て多数の弟子を指導し、多少のハ
ンデを付けて「たつみ」会ゴルフ
会でも優勝したりして鼻をうごめ
かしています。

朝日時代のことも詳らに知って
いるが、文章も仲々達筆でもあり、
下僚を愛し慕われるが、正論を力
説して、上司に楯付き、無論航空、
厚生部長の幹部ではあったが、大

幹部に昇進など顧慮せず社内心あ
る社員の親分的存在であった。品
悪く久琢磨兄を一言にして月旦す
ればいいこといいの別称でな
いか。
不幸にして土佐の名門から結ば
れた愛妻に死別されて二人の愛嬢
は揃って秀才であるが、唯一久兄
には頭の上らぬ実姉があつて、久
兄の今日あるその実姉の賜である
と思う。私は劇、仙台萩の政岡と
称していたが字義通りの賢姉だつ
た。久兄の長寿を祈るや切。
それ器かたからずんば物を容る
る能わざるがゆえに――。
小僧時代の兄事した伊達信雄君
は早朝店内多数の新聞の仕分担当
でミニヨンの歌を唄いながら迅速
に捌き、私は同じ全店内に配る檜
炭を大きな鉄筒に投じて酷い熱気
に堪えて頬をほてらして社員来社
迄に片付けていた。喜寿の挨拶に
も寸言を缺んだが、伊達は自分の
同国の出身で今倫敦の鈴木支店長
として将来大鈴木を背負うて立つ
高畑誠一氏があると常に恒に誇負
して己まなかつたが、大正七年春
私が退社した直後、彼も望みを以
て退し、岡山の私立中学の編入試
験に応じたと在高知の下屋の私に

李 方子女史 を迎えて

柳田 義一先生

拝啓

立夏の候 日本では早くも、梅雨前線が北上しつつ緑穂
の頃と思いますが、私は日本訪問旅行を 月 日に終
り引きつづき台湾を訪問して、帰国致しました。

日本滞在中は、各県の知事様、市長様、商工会議所皆様、
日韓親善協会皆様、議
会議員の皆様、駐日韓
国領事館、民団の皆様
に、御目にかかる事が
出来まして、誠に有難
う御座居ました。

私の今回の、日本訪
問旅行は、韓日両国の
友好親善を深めると共
に、私が韓国で運営す
る身体障害児の福祉施
設「明暉園」の御理解
と、それに供なう新築
移転の御協力をお願い
申し上げる為に「明恵

李 方子女史は御承知の通り我が皇室梨本宮家
から韓国李王妃に嫁せられたお方であられる。
背の君亡きあとは韓国内に於て国民の為に身体障
害者の救済に寧日無く全力を捧げていられると承
つたが、その御偉徳の程は量り知れないものがあ
ります。

方子女史には去る三月二十三日午前十時頃をば
降る雨の中を市内荳川谷法徳寺にお立寄りになり
劉 日海師の読経にて背の君李王の追善供養をい
としめやかに行なわれた。法要僧山内役員の一
人と親しく方子女史を囲みての盛大な斎を喜ばれ
和かな打ちくつるぎに興ぜられ御満悦の呈を拝し

「会」の活動を推進する事になりましたが、各県地元の皆様
方があたたかい声援を下さり、十分な成果を得ました事に
心から感謝申し上げます。今後共、積極的な御協力、御支
援の程をお願い申し上げます。
そして、一日も早く両国の皆々様のあたたかい協力によ
つて、明暉園新築移転が完成して、次代を背負う若い人達
に、この事業を引き継ぐ事によって、本当の両国友好親善
の実を残す事と確信する次第でございます。
在日僑胞の皆様が、訪韓の時、日本の皆様の来韓の時に
は是非私の住居であります榮善齋へ、お立寄り下さいませ
様心からお待ち申し上げます。
最後に、韓国ソウルの空の下より、皆様と御家族様のご
健康とご発展をお祈り申し上げ、帰国のごあいさつと、お
礼のごあいさつにいたします。

一九七八年五月二十一日

韓国ソウル特別市鍾路区臥龍洞一―

昌徳宮 榮善齋

韓国明暉園理事長

韓国明恵会名誉会長

李 方子

表紙説明
名作

小振り練上茶盤

内径 一〇センチ

高さ 七センチ

島根県温泉津

椿葉 荒尾常蔵作品

京都 河合憲次郎高弟

(編者収蔵)



李方子さん、劉日海師、柳田義一先生(右から)